

2024年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(冬期・社会人特別選抜) 問題

筆記試験 日本文学 専攻分野

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

受験記号番号	
--------	--

成	
績	

2024年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(冬期・一般選抜) 問題

専門科目 (日本文学 専攻分野)

(注意事項) ① 第一問の解答は、答案紙二十行程度を標準とする。

② 第二問. 1 から 5 までの解答は、それぞれ答案紙八行程度を標準とする。

③ 第五問の解答は、答案紙十七行程度を標準とする。

④ 第一問から第五問まで、すべて縦書きで解答すること。

1. 「文学表現を読む」とはいかなる営為か、自身の見解を述べなさい。また、その見解が、大学院で行う予定の自身の研究の目的、方法とどのようにかわるのか説明しなさい。

二、次の事項について説明しなさい。

1 山上憶良

2 『采花物語』の内容と特質

3 『方丈記』の文学史上の意義

4 蕪村

5 口語自由詩の成立

三、夏の朝の竹林を詠んだ次の和歌について、これを翻字するとともに、表現内容の特徴を述べなさい。

なつ朝の竹林を詠んだ次の和歌について、これを翻字するとともに、表現内容の特徴を述べなさい。

四、次の文章は、『堤中納言物語』の「はいすみ」の冒頭部である。これを読んで、後の問い（問１・問２）に答えなさい。

一 下^{しも}わたり^いに、品^いいやしからぬ人の、事もかなはぬ人をにくからず思ひて、年^{とし}ころ経るほどに、親しき人のもとへ行き通ひけるほどに、むすめを思ひかけて、みそかに通ひありきけり。めぐらしければにや、はじめの人よりは志^{こころざし}深くおぼえて、人目もつゝまず通ひければ、親聞きつけて、「年^{とし}ころの人をもちたまくれども、いかにせむ」とて、許して住ます。もとの人聞きて、「今は限りなめり。通はせてなども、よもあらせし」と思ひわたる。「行く^{いく}くもといろもがな。つらくなりはてぬとき、離れなむ」と思ふ。それど、来る^{くる}くもといろもがな。

二 今の人の親などは、おしたちて言ふやう、「妻^{めかけ}などもなまの、せちに言ひしに婚^{おぼ}すくもものを。かく本意^{ほんい}にもあらで、おはしそめてしを、くちをしけれど、いふかひなければ、かくてあらせだてまつるを、世の人々は、『妻^{めかけ}するたまくる人を。思ふと、言ふとも、家にするたる人こそ、やうとなく思ふにあらめ』など言ふも安からず。げにやることに侍る』など言ひければ、男、「人数^{にんず}にこそ侍らねど、志^{こころ}ばかりは、まをる人侍らうと思ふ。かしこには渡^{わた}したてまつらぬを、おろかに思へば、ただ今も渡^{わた}したてまつらむ。いと異^{こと}やうになむ侍る」と言くば、親、「やだにあらせだまく」と、おしたちて言くば、男、「あはれ、かれもいつち遭^あらまし」とおぼえて、心のうち悲^{かな}しけれども、今のがやうとなければ、かくなと言ひて、けしきも見むと思ひて、もとの人のがり往^いぬ。

問１ 一 段落の全文を、ストーリーがわかるように言葉を補い、丁寧に口語訳しなさい。

問2 二段落の傍線部に「心のうち悲しけれども」とあるが、ここで男が置かれた状況を、前後の文脈に即して説明しなさい。

五、次の文章は、堀辰雄『風立ちぬ』（野田書房、昭和十三年四月）の冒頭部である。この小説を読み解く上で重要なポイントとなり得ると考えられる事項（モチーフ）と表現・語りの特性について、本文の記述を抜き出しながら説明せよ。なお、複数の事項（モチーフ）や表現等を取り上げてもよい。

それらの夏の日々、一面に薄の生ひ茂った草原の中で、お前が立つたまま熱心に絵を描いてゐると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たへてゐたものだ。さうして夕方になつて、お前が仕事をすませて私のそばに來ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合つたまま、遥か彼方の、縁だけ茜^{あかね}色を帯びた入道雲のむくむくした塊りに覆はれてゐる地平線の方を眺めやつてゐたもの

だった。やうやく暮れようとしかけてゐるその地平線から、反対に何物かが生れて来つつあるかのやうに……

そんな日の或る午後、(それはもう秋近い日だった) 私達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、その白樺の木蔭に寝そべつて果物を齧つてゐた。砂のやうな雲が空をさらさらと流れてゐた。そのとき不意に、何処からともなく風が立つた。私達の頭の上では、木の葉の間からちらつと覗いてゐる藍色が伸びたり縮んだりした。それと殆んど同時に、草むらの中に何かがぱつたりと倒れる物音を私達は耳にした。それは私達がそこに置きっぱなしにしてあつた絵が、画架と共に、倒れた音らしかった。すぐ立ち上つて行かうとするお前を、私は、いまの一瞬の何物をも失ふまいとするかのやうに無理に引き留めて、私のそばから離さないでゐた。お前は私のするがままにさせてゐた。

風立ちぬ、いざ生きめやも。

ふと口を衝いて出て来たそんな詩句を、私は私に^{もた}靠れてゐるお前の肩に手をかけながら、口の裡で繰り返してゐた。それからやつとお前は私を振りほどいて立ち上つて行つた。まだよく乾いてはゐなかつたキャンバスは、その間に、一めん草の葉をこびつかせてしまつてゐた。それを再び画架に立て直し、パレット・ナイフでそんな草の葉を除りにくさうにしながら、

「まあ！ こんなところを、もしお父様にでも見つかつたら……」

お前は私の方をふり向いて、なんだか曖昧な微笑をした。

〔次行から問五の解答を記すこと。〕

8 / 8

五十一